

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



重 鑄

日本
山歲時記

秋

76
5440
3



逢^{たが}ふ時^{とき}に肺^{ふい}氣^きと^もぬり冬^{ふゆ}飧^{じゆん}泄^せと^{なり}は

事^{こと}は論^{ろん}より^く夏^{なつ}乃^の末^{すえ}秋^{あき}の初^{はつ}勢^{せう}と^{なり}る事^{こと}一^{いつ}

子^こ時^{とき}衣^いと^ぬき裸^{はだか}と^{して}涼^{すず}と^{貪^{あま}る}事^{こと}なり^れ五^ご

勝^{かち}の脛^{しん}穴^{あな}皆^{みな}背^せより^{含^くひ}て^{入^いり}て^{弱^{じやく}き}め^りて

風^{かぜ}と^{取^とり}又^{また}夜^よに^{足^{あし}と}露^{つゆ}せ^い風^{かぜ}背^せより^{入^いり}中^{ちゆう}風^{ふう}の

源^{げん}と^た切^{きり}ぬ^これ^とば^く一^{いつ}先^まり^て疾^{はや}り^る事^{こと}

是^{こゝ}の^{八^{はち}味^み出^でる}丸^{まる}と^{服^くふ}事^{こと}一^{いつ}二^に百^{ひやく}と^{忌^いむ}事^{こと}一^{いつ}

月^{つき}令^{しやう}度^ど義^ぎより^く煉^{れん}之^の月^{つき}收^{しゆ}斂^{れん}一^{いつ}と^{急^{きやく}揚^{やう}就^{じゆ}聽^{てい}す}

事^{こと}一^{いつ}なり^れ

揚^{やう}生^{せい}揚^{やう}より^く秋^{あき}氣^きを^{燥^{そう}る}り^{宜^なく}胡^こ麻^まと^{食^くふ}一^{いつ}

て^らう^れ燥^{そう}と^{潤^{じゆん}と}一^{いつ}

事^{こと}は論^{ろん}より^く冬^{ふゆ}衣^いと^{夏^{なつ}衣^いと}を^{分^わり}て^{用^{もち}ふ}事^{こと}一^{いつ}

疾^{はや}を^{瘡^{そう}瘍^{やう}と}する^事一^{いつ}新^{しん}穀^{こく}初^{はつ}と^{熱^{ねつ}一^{いつ}たり^{時^{とき}老人^{らうじん}}}

これ^{これ}と^くく^くの^{宿^{しゆく}疾^{ぢやく}と}熱^{ねつ}より^{多^{おほ}く}なり^{新^{しん}米^{まい}は^や化^か}

食^{じき}の^{風^{ふう}を^とと}和^わる^事一^{いつ}又^{また}早^{はや}指^{さし}の^{軟^{なん}熱^{ねつ}せ^ん}

何^{なに}を^くく^くの^{末^{すえ}と}は^{否^{いな}か}り^{志^しを^も宿^{しゆく}疾^{ぢやく}と}

疾^{はや}一^{いつ}瘡^{そう}瘍^{やう}と^{思^{おも}ふ}事^{こと}一^{いつ}能^{のう}脾^ひ胃^いと^{和^わめ^り}

病^{びやう}一^{いつ}と^はれ^れと^{なり}る^事一^{いつ}

月^{つき}令^{しやう}度^ど義^ぎより^く秋^{あき}衣^いと^{老人^{らうじん}指^{さし}の^{和^わめ^り}}

事^{こと}一^{いつ}と^{是^{こゝ}の^{微^い火^かと}用^{もち}ふ^事一^{いつ}と^{是^{こゝ}の^{和^わめ^り}}}

その跡も確證しつゝ處に此事の事やうに
久しき事ありと云ふ所の人を以て考へ
るにわざと申す事年の料を以て考へ
たりと考へる所は其の事一に考へ又
此事の事一と云ふ事も考へてこれと考へ
て又天と考へれば其の事一に考へて
其れ多し其年の料を以て考へるに
此事の事一と云ふ事も考へて
二月七日の夜に
酒池の事一と云ふ事も考へて

七夕の事一と云ふ事も考へて

その川水に其の風を以て考へて

古今集一 九河内形恒

年といふ事一と云ふ事も考へて

その事一と云ふ事も考へて

其の事一と云ふ事も考へて

終指集小指天細を以て考へて

其の事一と云ふ事も考へて

新拾遺集一 其の事一と云ふ事も考へて

其の事一と云ふ事も考へて

新法撰集より多治親王

中ね所ふねをわく一友乃たせ世葉はうけりかまれの
七夕乃稻杜牧

聖澤月地一おと末抵経年引恨多最恨明朔
洗車雨不交回脚後天河

又 晏殊原

野性母波斗柄秋愁情鳥慢ゆ移運毛使移衛
堪河澄一水還直有表時

又

織女牽牛雙扇開年一一度五河某言言天上
猶お見影勝人間去不回

○今日夢題とくふ事有り十節記よとくむう一書
氏乃好子七月七日は記すそ垂鬼報とてう今瘡
病とやうむうれぬ日はぬよ交解とてう一ぬぬ
そ危日はゆりうそ索餅とてうくろぬ垂とまう流
人これ日索餅とてう一瘡痛とてうれえぬ

は後たりうなるおあんとあす且ま瘡の外風を
異淫ふ威し肉飲食色愁ふ傷れて病りよめく
月夜母を夏傷は異秋ぬ瘡瘡と力へそりあられぬ
よく擡生せいのづううぬうそう人たぬぬ

日索解と食したるをくそ宿根既よる所なり
るれ髪とまぬる事ゆんや決してこれ理
なり世の人可い言と信するべし

○今夜二星とあるは凡果とほりぬ食物をま
香花とくまへ華のくは五色の多をつら様を
てく男女もよ不能事務といふれ有これと乞巧
歎といふあり或衣服と膝し書物とくは事
ありは事日有うそへ天年勝實七年にんり
しうしと事根ほよ又えくし
織女を乃彼天垣を
は遊守もは伴あり又
七夕早ふし何の遊舞を華乃悉れを
て槐乃多よやくり新勅撰集の奇よ

乞巧奠の事兼附花風全花をよはて皆れこれ
又うれ如くし事なりくしまねと婦人女まの
たもまにけ事とたさの形可なり趣くは或
乃とよ事よはりし書籍衣服とくは
の圃ふしと事よや都津の服中の書とくは
洗威を獲鼻禪とくはし多也くは信あり
今多集よ能因法師の事
七夕の昔れ衣とくはしかなくはしとくは

激舞更り七夕の夜也

天上の御座は此物乃家番教習秋夜来也

多見感不殆人間乞巧橋

揚子七夕此情

命命牽牛乞巧何須過秋夜并金梭年乞典
人間巧不造人乃巧者多

○今日草丸と合せ麴と化てうしと四月月令よりん
たりは日皮表と曝せの垣は重後七織にり
又角蒿と取く世禱書舞れ中よ玉の盡と確と
お塾事親よ刀へり

十二日二日より今日まで乃万夜うさる日ありれ
燐塵と拂ひ塵とたかりて塵埃とたきさる
へ一丸燐塵をとく一年に二ひりたりが
ゆき冬燐塵とほくさる日下く夫を
ゆきさる事多しれは塵ありは月日よりを
よく月をく信れとるひとひてよ
○せり乃夜はそとありあはれやうと
うより酒市みとたり又客とをりあり
とらり世よりうさる人今乃世信よさる
たりたせり人君をさるとまらるる人

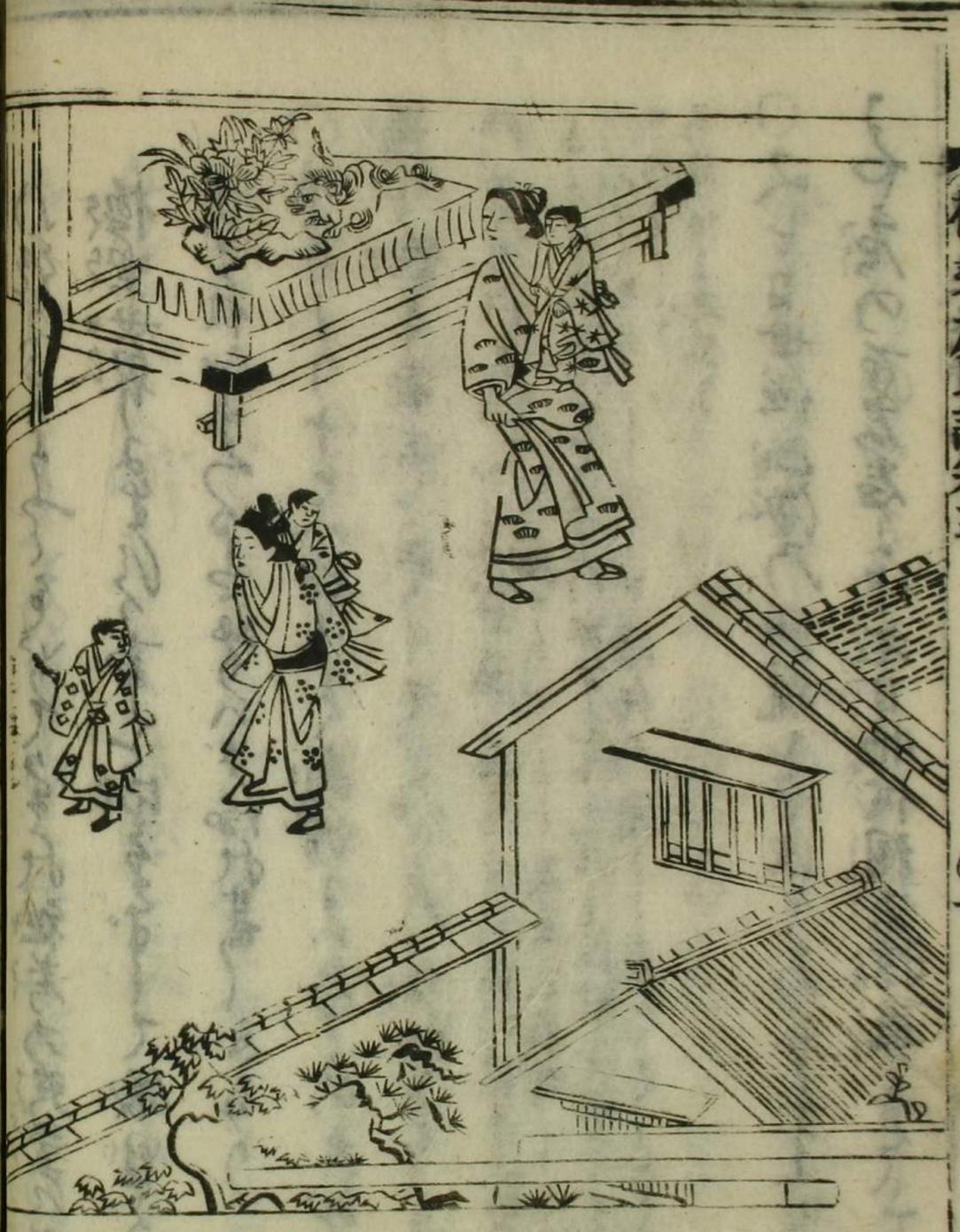
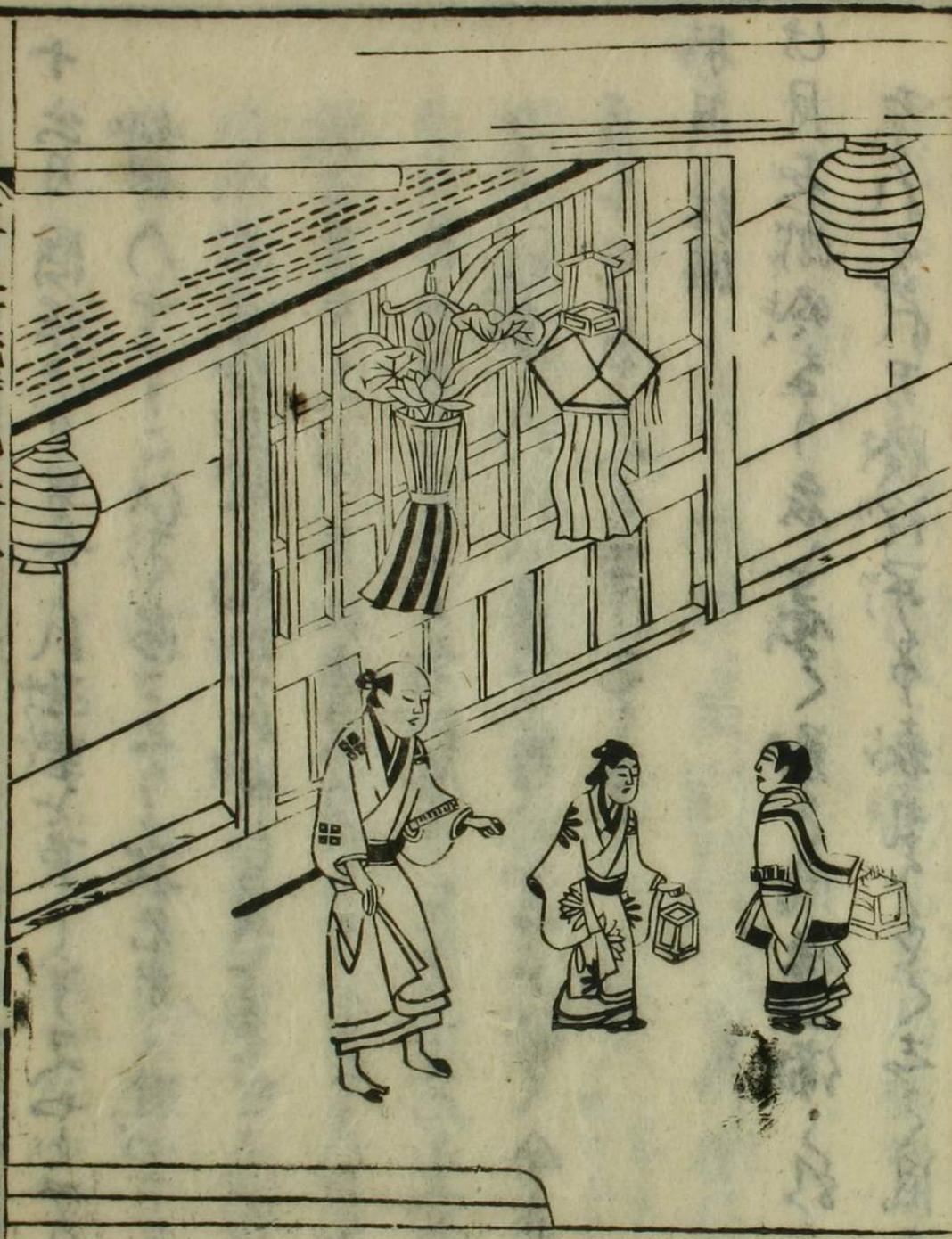
しるし風俗とる旨しれぬ事とゆふと
源氏目蓮の事と海會しての侍人孟嘉の経
才とよの書と他りて愚候とあはむくわ我 國
みく孟嘉の事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事
み年と始りしよ一後日本紀よりえり年中
の事秘を侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事

○五雜紀よりく七月申元日孟嘉の事と侍人孟嘉の事
母儀鬼道小漏りありけ功徳と後く彼の侍人孟嘉の
志く食とる事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事

乃後よまうとくもがうそを祀考の天臺の登り
極樂世界よまの事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事
てこれとまうとくもがうそを祀考の天臺の登り

○能書より十七八載まく高橋よの事と侍人孟嘉の事
霧と能す教工と考しての事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事
乃尺のれまの 中元ふ能書と能とく後堀門院書と侍人孟嘉の事
の事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事
又能書よの事と侍人孟嘉の事と侍人孟嘉の事

○又七日世伝山海乃漁流とせ候とるしよまがれ
くわ能の百友と中元日世伝石搦魚と侍人孟嘉の事



又桶の竹筒に今池のひびきとまきと一又木の桶は
 板とを同うう久志が板減ははく昔板もへらその
 ように板をとりて書たしくかきとく一木をたれは
 やまひ取むす耐ちりたより穴とちまうまう取出し
 わくあ栓とまきとまきと又杉よへころまきとく乃船又
 通る美床より垂ハ動揺して揺さす

天氣好時た代書せり符添く奴僕命一志紙を
 他一紙一製法定巻くより取面よたる紙とまきひ
 めり折敷し水ぬたなくたれ紙のくしひて四方とくお
 ら紙くまき一又中用ハ反板とより一まきとくまきと

全紙とてもあ日よりあしひきひのり又ハかきたうよ
 志が加えてのりくくくつぎばげく書美一これハ
 ちとくおさす一てすまてちのりと水よ入らりと去
 て一雨は堅め焼飯のどくまきりめあくよと紙と包
 樂原たよりくよより火とたは紙付かよ取かきとく
 らよそ細よとよりこまきとまきとすり合巻と用てま
 ぐらとゆえしつらたはまきとまきとひのりひのり
 て四方ち尺守よ書よりとまきと定のまき紙と折てりれ
 くおたたる紙とひろぎつぎあよたれくくくまきとあり
 と引てつぎひろめあまきよのよより知く守竹節一てす

こと二返目をまゝとすや今ひららるるおれのおさうぢり紙
 のたぐやとまじるとひららるるおさうぢり紙とさうぢり紙
 ひらまじくとけとぬくとまじるとひらまじるとぬくと
 了付合ふとこれとのまじるとまじると付合ふ所又
 治まじるとまじると付合ふ所とまじるとまじると付合
 うとまじるとまじるとまじると付合ふ所とまじるとまじると
 同あるり紙よりとるかとも毎分内とまじるとまじると
 引てたれどくま合はらんたのこくく紙とるよりか
 引投能付合ふ所とまじるとまじると引て紙よりとまじ
 了よまわけの紙よりのかと内とまじるとまじるとまじると

かのくあきた方乗とよふ一西んたり付りこくたれこ
 こくしてまもろくとあまき一紙とぬとぬとぬとぬと
 てくらのあまうらう紙よまじると引まじるとまじると
 まじると付合ふ所よふらうまじるとまじるとまじると
 付く後日よまじると一引て後又うとまじるとまじると
 引毎分平一引偏うまじるとまじるとまじるとまじると
 表ひく後表よまじると引まじるとまじるとまじるとまじると
 抄よまじるとまじるとまじるとまじるとまじるとまじると
 け都く都へ一
 五秋乃後花乃及草著薜葡萄高崖乃種と都へ一まじ

ありて宅中へ花蔓草とすくまけハ露食なり
 去るハ八月の後すくくハ蘿蔔を中すくちこれ
 ちやく所なれ根ぬ一七月初まく一蘿蔔辛
 蘿蔔も蘿蔔と同所すくく一蘿蔔根ぬ一
 宅中へ中すくく一子く芥て一胡椒辛と八月
 乃初まくも可なり大蔥中葱辛とすくく大蔥の苗
 とわくちう葱中葱根とすくく
 八月の末皮とむむを法書橋と取たりごと皮
 と收日と乾す

八月蔓と食よりかたしをよと場農所り人と書す並と

食ハ目と搾す麻稼をくくハ氣とくくハ葉更
 とくくハ神草とくくハ息起と多く食ハ人と傷り
 葉と食ハ氣とくくハ次生草と多く食ハ暴夜
 乳を多し生薑と食よりハ猪肉多く食ハ神乳
 と搾す之秋乃後葉餅及水波餅と食より
 去秋此後十日凡と多食よりハ次
 去七月葉葉草とくくハ冷水と多く香くハたハ
 齒肉を多くくくハ後日よ切りて病を生す又七八
 月乃乃葉草とくくハ秋の時節生冷ハ物果多
 と多く食よりハ淫邪ハ氣肉と滑くハ瘰癧とく

まじき情を怨よまじりて候

七月乃去候才一強風正才二白雲津才三雲之候也

右立秋の三候なり才曰嘗乃去才立王地

始肅才去禾乃登才立王地候なり

立秋昼中刻十分夜中刻五分

立秋昼中刻十分夜中刻五分

八月

八月乃中○八月の候也
八月乃中○八月の候也
八月乃中○八月の候也

朔日倍よ八朔と云今日たのそとく人よ物と送勝と云

事有りなる根はよとくこれするを又よ本祝なり又

西禮をよあくる世俗の風儀なり或假名記よ建長

と折敷也なるも中よのく人乃よとく此のりか

とるも又天明と大岡れ又承の記よ廿七八年より案

證よ天下には流布せりとのき終りて誠よ建長

此乃事なり久きり或後よ六法証書院の事よ

て加藤通方也此等の中在りり一時田舎志と云

さ先りよとくを智乃男女也よまじりけりよ

事記よ聖徳とりのり女流ひりり嘉瑞ありて

由はさしありきるをそとへ傳へりうれに道は
色なきがわの事なりすまの志をたしめりはる年
化を智明なるに下しは後世流るは世に河が
よりなるなりとるや細るよ今年中は事此中に
去るはつる事強ありとてまはしころ群を世より
つよめて何そぬとも世に事此理を去るは傳へ
たし海にすま大なる事ありとて世に知くは家
すしと通又鴨^{鴨のちやう}明の四葉抽然よとくはわらわの
あしとあふれはの道はひとむしは行てまの
たすはざりしと小ねりそとまはる人よとまはしは

一はたしくまつるをそとへ代ははるはほりても
直るなりきるをそとへ代ははるはほりても
いわざよとるはまはるの道はひとむしは行てまの
らくそまつるはの道はひとむしは行てまの
わらわらとては事はるはまはるの道はひとむしは行てまの
あつるはまはるの道はひとむしは行てまの
は事はるはまはるの道はひとむしは行てまの
とるはまはるの道はひとむしは行てまの
まつるはまはるの道はひとむしは行てまの
今業とるはまはるの道はひとむしは行てまの

の物此れ後よりとて始むる事は一は久し
 不なる人信んせんぞと延長式に家内事をも
 文次をわく酒史をもあゆみせんはよくも
 信り給へる事根原乃後とわすしとて一は
 直せりては中一信りせぬる事物此れと
 ぶくもハ信書る人ハ新力とてよく事
 をもしつらぬる事一今い書よ引用ハ考
 傳ハ家のと又今い書よ小昔よは秋ハ西
 といふ出玉回のそめつわらとて平ハ一
 ありともハ月朔膳となす信もと膳膳と
 月令度義潜確新書とてに及てり膳ハ田
 かりと信り念ねる事ハ日ハ此ハ初ハ
 不郵せる事一

○今日 楚程より 將軍家よ物筋り又 お家
 かりも山勢とハ終何ハ事ハ是ハ一

十四日 明夜ハ臨臨人ハとてこれハ是ハ一ハの月と
 貴ハ一ハ臨明後ハ八月十日長ハ

紙屋考露晴垂玉候初と歎園時信信志
 宣先貴明夜臨臨可也

十五日 中秋とハ秋九十日ハ平方ハ信り國信

今日の協定乃わたり申す故生會とすははし事人
皇中四代元正天皇乃所立皇孫德仁年九月は大隅
日向交國乱逆すははし母田原太子孫家之儀の
少岐之乃孫聖幸德勝波豆采御軍と引率あはく
彼國と征し事成牙く殺とてしりりらわら
ハ協乃正化室よは度の合戦多々くれ人と殺しけ
亦村生會とおはしりし御記ましくされハ徳國よ
してあはくいは儀とていひけりし一按桑記に
見えりきましくは協乃所立をまはしりて
しては儀と行なり

は事りあらしく人を同化せしむるは新集合編よ

日永八月十六日故生會呈百歳其樂有本國云

藤原部とてりやり年中の奇合は新中細云

世まかくては協定をましくいひまるとははし事人

○今をこは秋はあはくははし月成意はあはし月夕
とてこ五夕ともいふ事人證客乃晴とてははし夕
林はあはし稚よとて今秋月とてははし夕
是れ世より事人してははし人々人を誅せりしこと
古樂府よ嬉嬉然乃あはし人の中秋は月をば
らりてははしとてははし時を渡れせりしをばはし事

又のろくはるし骨餅と繋いでるの
 概より月餅と繋いでるなり又月餅を瓜
 骨と繋いで看月令と云ふなり月令廣義と云ふ
 歐陽詹既月待序云月之為既冬月則整衣大室
 別蒸重大契中蔽月如後入蔽与後佳言既秋之
 於時後夏先冬月於牀坐如孟秋十五於夜之月
 之中。積於天遠則定是均取於月數則埃兔園。况
 埃遠不流大宅修好城能細地舞上深界在床
 入西樓肌骨与之疎涼秋氣与之清冷

○事云要云月秋と云く月出此之種神也全氣

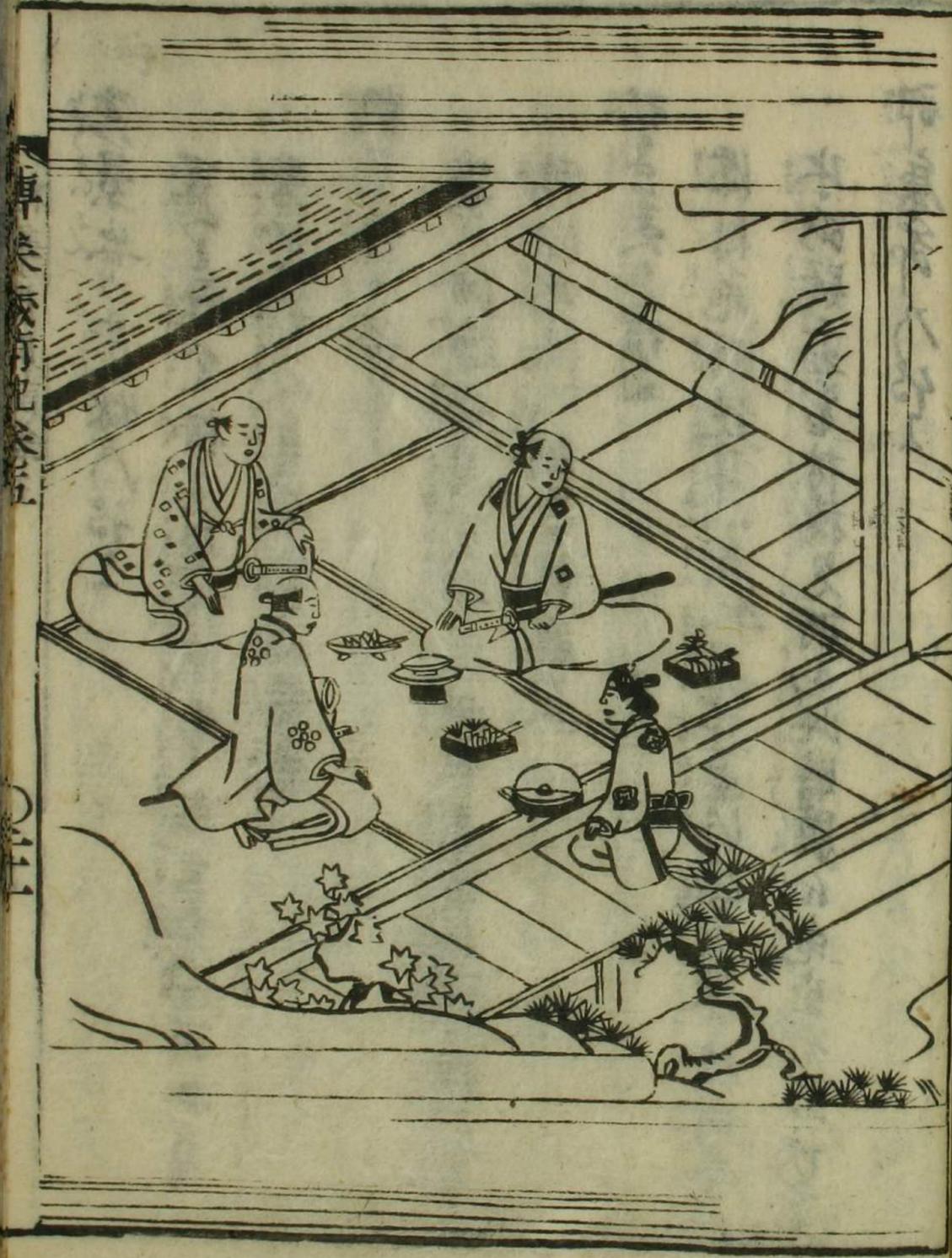
全水性也生也行分其事則知天既間。和感各以氣
 水以全還盡月固秋更清氣散彼之物人惟不之信
 後古全集と天房ハ所云

月といふ月か事と付の事ハ月といふ月なり
 新勅撰集より中還法師

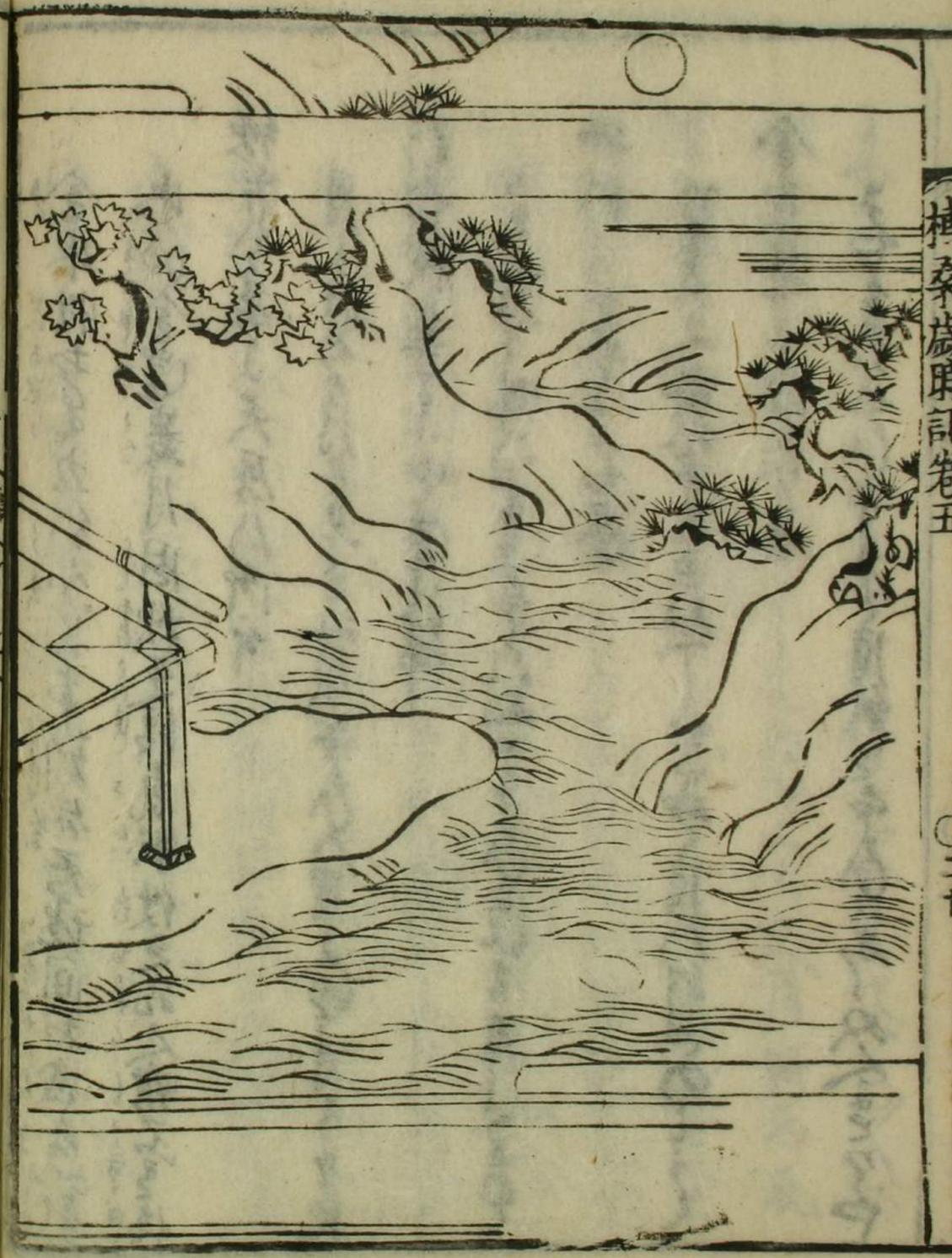
りと云は煉乃中え志れぬこといふは月一と云ふ
 地所集より元志

阿多ハ又煉其本を包ぬ一といふ月ハ此の
 全氣集より源親房

云々といひなり月氣と云ふは云々ぬ人なり



博多屋敷



博多屋敷詞卷五

張景安の中州乃得之

取玉秋空掛玉盤
搜得清香思
想之思
四河此月

別字
別字
人自今宵冷眼看

鄉子競く得之

夜々池邊停月坐
却悲此夜
易天明
還雅引秋

秋江水添入
網壺靴履更

松子美く得之

滿月飛明鏡
傳心折丈
乃抄蓮以地
卷樂桂仰天
而

水路疑
若雪林
橫見羽
毛此時
睡白兔
車欲數
秋毫

邵康節乃得之

一年一度中秋夜
十度中秋
九月
逢來滿
玉頂
而

夜中
要明仍候
到天心
是
雲照
雲情
非
淡不
睡

親時
志
深
流
若
古人
詩句
好何
堪千里
世如
今

○今夜
聖果
と
海の花
影
以て
その
多し
と

月令
度數
又
是
了
又
は
牡丹
と
梅
一
載
る
事

今日
して
下
常
去
る
宜
く
候
る
根
と
淨
く
洗
へ

香酒
と
は
く
洗
へ
丸
妙
なり

二十七日
孔子
乃
生
れ
流
ひ
日
あり
これ孔子の生れ日なり
はが流儀ゆへなり

晦日
休
儀

そ
ろ
こ
ま
社
日
ま
く
三
秋
乃
後
才
又
の
成
其
日
土
乃

祓と云ふは多行（既二三月の祭）母信禮と云ふ原天と
 地と云ふ所にて日月乃冬と云ふ一紙とあがらうと
 此族乃祀と云ふ所の多一紙乃淫祀と云ふなり
 一乃改と云ふひらり一の風俗と遊と云
 秋乃社日（祭）と云ふ事なり也也郡中も八九日此
 比土地の祓と云ふ是と云ふ秋社より云ふ所なりや
 志んれどもこれ多のそら淫祀多しと云ふや相里こ
 と云ふの日もたれも農高れ家も他村より来る事
 ぬも饗祭乃案多し其の儀と云ふ所の答禮と財と
 費一亦者と云ふりとのあり一は此依湯忌國
 中此祭日只一日と用一と命せらるる是も一徳法外
 才より一又母信の八九日土地乃祓と云ふの時徳法外
 事と製一と事案の祭一親戚鄰里よと云ふ事
 何れもろく一も社日なりかたなりは行りや蓋し
 祓乃秋社（社）乃社祭酒法と云ふ事なり
 上旬小日と推（推）と云ふ事なり
 祓乃日考妣（妣）先祖乃祓と云ふ一なる事二儀なり
 より後陰氣日（陰）に去一日をやう厚くしり社祭
 聖りて日夜ひらるるを陰と云ふ一と云ふ事なり
 乃雨と云ふ一ゆりぬ

月半の夜郊野の遊観をへ

は月半の夜郊野の遊観をへ
くたから親戚と客をへ

此月半の夜郊野の遊観をへ
宅中より露をへ

萬草花の初前へ
中秋の月夜へ

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

あつたれはまじか
たかおのちの土

とらふ性質

八月葉と摘みしはまき葉を以てて元採根多し八月採去

秋枝葉物枯津洞被は下左秋採宜助毒葉各

陰其本葉也とて二月乃都

八月竹ととれハ月令度敷ハ六月在ノ持物等ありと

あつと野をへ一元持物等不難法うを代皮と火

あつとやその煙あつと羊とあひたれハ永く不難ま

書と及釋ハ灰汁をく洗つるをより一洗中を之しと

候したるを虫をよひら幹後抽矢葉木刀等も若し

八月又持物釋と收まへし布と市し紅紙と用ハ絹布

と染毒をくぬそ所用也

此月天常涼冷なり多し生果と食みから次生蒜維持并

生蜜維子解と食みかられ又萌芽と食み子を忌

度義よんえたり重及七藏よんく以路石法地乃

流泉と飲事かりんをて瘳脚軟と毒せしむ

八月の古候才一階厚才才之玄智故才之飛高才

羞太白霜乃三候なり才に雷如始身九響

露如戸才去水如洞古秋分乃三候なり

白露登五十二刻十分夜半七刻五十分秋分登五十

刻夜五十分月令度敷

刻夜五十分

九月 蘇州府志卷之三 九月の蘇州府志の九月の中 九月の吳郡の蘇州府志

九月 蘇州府志卷之三 九月の蘇州府志の九月の中 九月の吳郡の蘇州府志

朔日 今日より八日まじく給衣と云

八日 沐浴

九日 重陽と云月と日と二かりう老湯の類は皆

不かりふまのり又重九まじく不田信今日より重九と

云又今日粟子飯と食ひ菊花酒との心

他方多かり 蘇州府志は二社を湯尚食糧而ま湯を盛大率に

云かひ粟子飯と食ひ菊花酒との心 蘇州府志は二社を湯尚食糧而ま湯を盛大率に

阿の乞と云湯乃雲と云粟と云酒と云酒の根は

云の乞と云湯乃雲と云粟と云酒と云酒の根は

一と云今日粟子飯と食ひ菊花酒との心

蘇州府志は二社を湯尚食糧而ま湯を盛大率に

不かりふまのり又重九まじく不田信今日より重九と

云又今日粟子飯と食ひ菊花酒との心

他方多かり 蘇州府志は二社を湯尚食糧而ま湯を盛大率に

云かひ粟子飯と食ひ菊花酒との心

阿の乞と云湯乃雲と云粟と云酒と云酒の根は

云の乞と云湯乃雲と云粟と云酒と云酒の根は

死すの世にこれと申すこれ汝の命をたねる中
 只の世に九月の毎に少くも花の菊のこの
 婦人若黄囊と帯をよけかきか
此法を述ぶ婦人
 位すうらひ五
 猪乳をいりて九月葉黄と佩ひきり菊の海とのむね
費毛房極多は実と遊の種と教ふといくうれ本中はこれ
 菊系雜記に殿夫人の位覺佩菊の中は有りて九月九月は蓬解
 と合ひ菊の海とのむねすれいんをいりて事考なりいじはあに
 下りはきりてる菊とあはれと信じては漢に
 又月令廣義は仲書
 りめとてはさう菊系は始りたるなり
 と引てその葉黄と辟邪菊と菊の延壽
 客とに成る九月は二つ物とかりて陽九乃飛と清
 とはあらん悪夢とてをば説後授とすうにたす
 周書の周礼に九月九月律也射の南の懸九か

る菊の俗にけい日と尚んく葉黄房とけて
 挿じ氣通氣と辟除して初室とあせぐま
 ととく是なり西記なり又今日菊の海とのむね
醫書ありしむを製法菊を舒く時花を蒸籠に
 其よ蒸籠にまぐりてこれと穢し本年九月九月
 此と取あしてこれと飲んこれと菊の海とのむね
 菊系雜記にまぐり
 ○五葉世代中人日と陰と上包撒平七文を陽の中
 菊の葉を製する西記俗をきりて九月白の肌赤の
 志を陽敷と申すこれに人陽と尚ん

相承歳時言卷五

三十一

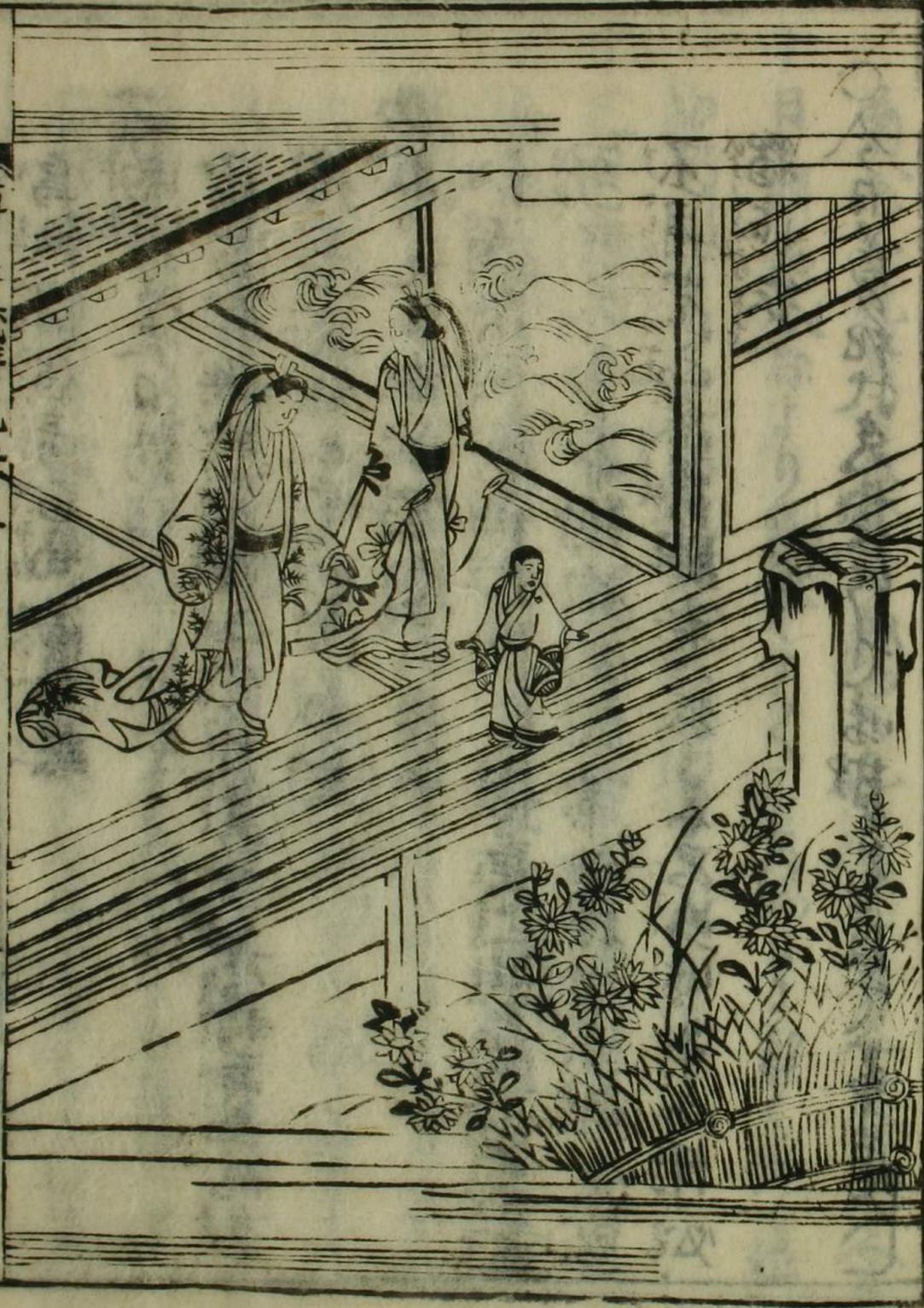
なりと昔未だ子に及て下りし夜中一とては昔人
 のそとゆり下りともつ庵一物も又海人の義
 と去り伏聞玉屋系織女桓宗等とては織
 ては由とすその事際たれり

練千載集より新院別当典信

以来北條公をて丸をに子代まてかくれぬ事なり
 の事座百とれり家

長月やきふと夜更に花の枝より世を中へ上人
 張芸史より重編乃得

一見其花只日羞さうまろえたり蕭然あはれ後髪のり不す禁あはれ秋の誰の人為たれ整と



鳥紗帽 猶倚西風 滿眼愁

越約月九日乃得

履齒 雁脚 印波 海 云 月 落 帽 斜 西 風 雁 脚

備 芳 絲 林 上 廿 二 日 秋 花

杜牧九日寄江州刺史

江 漸 秋 氣 雁 初 飛 塞 空 樓 臺 上 登 客 傲 人 世 幾 逢

野 口 笑 菊 菊 頻 插 滿 頭 歸 但 擬 飲 五 盃 佳 節

不 用 定 心 愁 落 暉 古 往 今 來 只 此 情 牛 山 何 必

猶沾衣

○今日菊初綻 秋氣漸深 雁初飛 塞空樓臺上 登客傲人世 幾逢野口笑 菊菊頻插滿頭歸 但擬飲五盃 佳節不用定心愁 落暉古往今來只此情 牛山何必猶沾衣

菊在九月一更一 秋九日一 月今廣義に之

十日 國儀今日より 是夜とく 二月晦日 望月終る 但

とら 下りをまゝ 移さしめりす

十二日 倭儀今宵 月次書に 中秋に 吉田

夢 ぬく 終る 八月 廿二日 九月 十三日 八 舞宮 あり け 若

漢 明 なる あり 月 と 敬 不 良 相 と 子 日 や 又 是 たり 志 れ

こそ け 祝 他 れ あり と 志 け 次 是 牛 宮 と 津 考 たり

又 月 母 大 小 あり ち ぐ ち あり 健 たり たり たり たり たり たり

を 月 と 美 たり 國 あり 中 秋 たり たり たり たり たり たり たり

を 佳 節 と せり 我 國 又 九月 十三 夜 と 用 たり 月 次 書

これの候月乃とくまはるも中事やんらうけり耶
道系忠通号性寺九月十三夜既月待よ

用窓窓寂寂月月秋秋候候風風屬屬宿宿候候望望馬馬城城満満宮宮芳芳院院

渡渡雨雨竹竹持持家家持持徑徑瀟瀟系系和和琴琴十三夜十三夜秋秋形形勝勝於於古古教教

百年百年究究不不若若人人不不物物信信前前折折回回首首見見清清明明時時又又價價平平金金

晦日休演

は月月節節遊遊して血血脈脈と打打撃撃之之一一

上旬上旬小小少少多多とうと下下旬旬に大大差差と符符へへ一一表表を秋秋うう多多く

交交變變とら友友四四付付乃乃氣氣ととうう之之符符と月月令令度度義義ととり

地地肥肥饒饒ちちらら取取ららくくううゆゆままハハ其其盛盛衰衰ととくく定定めめり

十月十月以後以後十二月初十二月初ままぐぐややくく一一

亢亢第第とと尙尙九九月月以以ああ一一取取のの代代八八日日にに乾乾へへ一一十月十月以以後後

様様ものものハハ陰陰乾乾一一ととうう一一ととああるるまま一一んんええ一一りりああれれハ

交交候候ととらら葉葉ハハ日日にに乾乾一一冬冬ととらら葉葉ハハ陰陰干干一一寸

ささののりり但但葉葉種種落落葉葉新新芥芥らら毛毛ををハハ久久一一くく日日

小小布布せせハハ氣氣ううままくくななりりかかんんととひひりり付付ららぐぐ收收て

陰陰又又平平一一

は月月特特丹丹芍芍薬薬及及竹竹法法果果木木ととうう一一様様一一とと月月

令令度度義義一一んんええ一一りり農農政政令令書書ととううくくんん果果木木ととうう

ゆゆのの小小らら先先九九月月乃乃中中代代後後樹樹ののままりりととあありりてて繩繩と

ひくまりのとちけりたるりふハ肥土を入水と流し
— 次年正月二月の梅敷へ — まきと四月の
部は無し

ひ月梨と收獲へし月令度敷いらく石炭後一粟と
取水多れ肉入くくくそのを去日おり油と
炒く冷し新壺に入油一を粟一を焼くよ地へ一壺
した一こ入る多きハ折し竹葉を地へいれ
と竹片ありろ乃どくかなる物あくいとちかくれ
いかり地よ太れ壺とくつむぎに葉をり酒をよらる
つらるりありれ又塩水一二杯浸し取おし日干し
胡麻と拌せ葉入る入る — こそ又時地山中乃野人の

既よハ生葉と二月日小なりを後能考く又月日切
壺よ收りとり玉ハ出くろりて味其ありとあり
又大葉と生あり餅一玉ハ大葉乃葉生する玉
やさくいとあて壺に入る玉をたきろりやこれ葉を
用する也一は粟此葉やど小葉と一あけ壺の口
ふためさうさ海いなりハの方と地よ付葉へ一葉
生せす久しくこゆらなり又赤土と葉入る
肉よくつと葉くもす
は比米穀と求貯へ一用多し
此月薑を食るやちられ痼疾とがゆゆ結とくハ根を

傷^あし^あと換^かす^かと食^くう^く次^{つぎ}船^{ふね}と食^くう^くと重^{おも}船^{ふね}と
多く食^くう^く次^{つぎ}大^{おほ}肉^{にく}とく^く六^む人の^{ひと}移^{うつ}言^{ことば}と傷^あふ^あと冷^{ひや}の^{ひや}也^{なり}
と^と吊^{つり}して^{して}痢^{りやう}疾^{ぢやく}と^と滑^なる^る一^{ひと}月^{つき}全^{ぜん}廣^{くわう}義^ぎ也^{なり}

九月の古候才一^{いち}鴻^{こう}鷹^{たか}才^{さい}二^に雀^{すずめ}入^い大^{おほ}氷^{こほり}為^なる^る也^{なり}

二^に菊^{きく}有^ある^る也^{なり}才^{さい}六^む藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}四^し射^や乃^{なり}

才^{さい}五^ご茶^{ちや}の^の木^き葉^は落^おち^ち也^{なり}才^{さい}六^む藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}七^{しち}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}

才^{さい}八^{はち}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}九^く藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}十^{じゆ}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}

才^{さい}十一^{じゆ}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}十二^{じふ}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}

才^{さい}十三^{じゆ}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}才^{さい}十四^{じふ}藝^ぎ出^いる^る也^{なり}

日本軍情記卷之五

